＜学びの教室コラム＞「学び・遊び・つなぐ」プロジェクト

私の歩みと特別支援教育

茅原久子

１　はじめに

鳥取大学の学生向けに「特別支援教育」についての講義をする機会をいただいた。自分の実践を教職員の研究会等で発表することは今までにもあったが、今回の対象は大学生の皆さんである。特別支援教育に関心のある方やこれから教師を目指す方々に、どんな内容をどのように伝えるのがよいのか･･･。出した結論は、今まで自分が考えてきたことや実践してきたことを「歩み」という形で伝えること。その中で、皆さんが何かしら感じてくださったことが、今後のステップに向けてのきっかけになればと思い、「私の歩みと特別支援教育」というテーマに決めた。

教員生活３０年の自身の歩みを振り返ることは、多くの反省も伴うので落ち込むこともあるが、それでもいつの時代も子ども達と支えてくださる保護者、そしてともに教育活動を創ってきた仲間がいた。今回、「学校は、子どもも大人も学び育つ場であること」を再確認できたことは、私にとってありがたい機会となった。講義の概要を伝えたいと思う。

２　教員生活を振り返る

これまでの教員生活で、様々な出会いがあった。今でもエピソードとともに記憶に残っている。例えば、小学校の講師時代、参観日で「板書がわかりにくい」と容赦なく言ってくださった保護者がいた。子どもたちの目線で授業を見てくださっていたからだ。そのような温かいまなざしを持った保護者の方々とたくさん出会ってきた。その中で、自身の子どもたちに向き合う姿勢も大きく変化していった。特別支援教育に携わったときもそうだった。子どもたちの姿から学び、周りの方々に支えられ、少しずつでも成長してきた自分がここにある。

また、この３０年で、社会や環境も大きく変化した。今では当たり前のインターネットやすぐにコピー・印刷できる環境はなかった。しかし、学校教育はどの時代も日々行われている。ここで、学生の皆さんとブレイクタイムを行った。

『３０年前の環境です。どうやって授業づくりをしますか？』

この問いかけに対し、パワーポイントやデジタルな情報に頼らず授業を準備し実践することについてイメージし、考えたり意見交換したりする姿に参加してくださった学生の皆さんの熱意を感じた。そう、いつの時代も大事なことは変わらない。教育は、「子どもたちに、何を、どのように教えるか（伝えるか）、それは何のために」ということを真摯に考えることだ。この場でも、根底にそれが流れているのをうれしく思った。

３　特別支援学校って？

県内には、様々な障がい種に対応した特別支援学校がある。特別支援学校は、障がいの状態や特性に応じた教育を行うので、小学校・中学校・高等学校とは学ぶスタイルが異なることがある。しかし、今の社会をよりよく生きていくために必要な力を培い、人としての成長を育む場としてはどの学校も同じである。特別支援学校のことをもっとたくさんの人に知っていただ

きたいという思いから、知的障がい特別支援学校に勤務していた時に、当時の同僚とともに学校紹介ＤＶＤを作成した。１０分程度に編集した内容であったが、「百聞は一見にしかず」である。主に交流及び共同学習時に小学校・中学校で活用していただいた。このＤＶＤをみてから、実際に交流することで交流校との関わりがより深まったと感じている。今回、学生の皆さんにもこのＤＶＤをみることで、特別支援学校の一端に触れていただいた。

４　単元開発はおもしろい

特別支援学校の醍醐味は、子どもたちの実態を踏まえた授業づくりが柔軟にできることにある。実態に応じた目標設定とその評価をていねいに行う授業を繰り返すことで、子どもたちが主体的に取り組むための支援が明確になること。そしてその支援は、生活場面での主体的な動きをひきだす支援へとつながっていくことを、小学部生活単元学習の事例をとおして伝えた。ここで、学生の皆さんと２回目のブレイクタイムを行った。

『子どもたちが自分から取り組み、一人で、先生と、友達と進めていく「遊び」には、様々な力を培うための内容が含まれています。こうして培った力は、子どもたちの生活をより豊かなものにしていきます。これから遊び場をつくって一緒に遊びます。どんな遊び場を考えますか？』

ここでも、楽しい意見交換が行われた。発言の中に、「○○な子どもたちのために、□□な場をつくりたい。」「△△だと、よりたくさんの子どもたちが遊べるのでは･･･。」等、子どもたちの実態を考えた場の設定について、ああでもない、こうでもないと言いながらグループで考えていく姿を見ることができた。同僚とともに、このような議論や修正を積み重ねて、子どもたちに必要な単元を創っていくのである。特別支援学校の教職員は、単元開発を楽しく取り組めるチームであり続けたいと改めて思う時間であった。

５　大切にしてきたこと

小学校と特別支援学校を経験してきたが、学ぶ場は違っても教育の本質は変わらない。そして、学校教育で大切にすべきものは、昔も今も変わらない。それは、子どもたちととことん向き合い子どもたちの姿から学ぶことである。大事なことは、いつも子どもたちが教えてくれるのだから。そして、「学校は子どもも大人も学び育つ場」であり、そんな風土を持った職場をこれからもつくっていくことが必要なのだと考える。

６　おわりに

最後に、真剣に話を聞き一緒に考えてくださった学生の皆さんに、大村はまさんの詩「優劣のかなたに」を紹介した。いつ読んでも、「教育とは何なのか」を考えさせてくれる詩である。

現在、「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方が中央審議会の特別部会で論議されている。教師の学びについてどのような在り方が望ましいのか検討し、審議のまとめの中で「新たな教師の学びの姿」を示している。様々な体制整備が行われる中であっても、自ら学びを求めて試行錯誤しなければ、子どもたちにとってやりがいのある学習を提供することは難しい。今回、学びの教室で学生の皆さんと考えることをとおして、自ら教育活動を創っていくこと、同僚とともに創る大切さを感じていただければ幸いである。

茅原久子（鳥取県立白兎養護学校副校長）